



始









◎解説

◎漢瓦當文

悉く推るに十一月三日は、先帝陛下御誕辰の佳節にして我が法書會亦實に明治四十四年の此佳日を選びて書苑の第一巻第一號を發刊したり。爾來月を閲すること六十有一、幸に大方識者の贊同を得て健全なる發達を遂げ、今茲に卷を改めて第七卷第一號を刊行するに方り、我が皇は此月の三日を以て立太子の盛典を擧げさせ給ひたり。本會は謹みて漢瓦當文中の吉祥語を選擇して之を本誌に併せしめ、以て奉祝の敬忱を奉呈す。

◎伏見院天皇宸翰後切

伏見院天皇は、御手いとめでたく、むかしの行成大納言にもまさりたまへるなど、時の人申しけり、やさしうも強うもまさりたまへるなど、増鏡に見えたるに、御書名實に其の當時より高くおはしませしける事知られたり。御書代天皇の宸翰は、聖武天皇を初め奉り、各優れておはしませしける中に、假字をもうはしう書かせたまひけるは實に伏見院天皇を第一位に推し奉るべし。筑後切は、後撰、拾遺二集の巻物切にて、料紙は雲紙也、もとは古今集もありて、三代集六十巻具備せしものなりけむを、古今二十卷は夙く其の所在を失ひて、他の二集中の二三卷のみ、世に傳はり、其餘はおほかた断片となりて諸家に散在せり、本誌掲げるところの者は、拾遺集第二卷夏の部の一片なり。

今此の宸翰を拜すれば、かの「やさしうも強うも書かせおはしませしける」といひしこと、まことに其の當を得たる評語なること知られたり。粟田標の流祖菅原法親王を、御手に持たせたまひけり程ありて、御筆力の遒勁にして流暢なること真に上代三張の域に接したまへるものといふべし。此の天皇の宸翰中の真字は、文化年中に遠江人齊田茂先が還集して屋吹久能が勸成せし、尚古法帖第四に載せ奉りたる白氏賀雨詩、讀張君藉古樂府詩の二篇、及び法書會の刊行に係る題靈巖寺、花前歌の二篇を見るべし。題靈巖寺、花

前歌の二篇は、道風朝臣の筆として世に傳へられたれど、恐らくは此の天皇の宸翰ならむ。(周魚記)

◎弘法大師眞蹟辨證指歸

豐野指歸は大師が延暦十年中年齒僅かに十八、其の名を佐伯眞魚といひて、未だ得度せられず、大學に遊ばれし頃、或奮する所ありて、信宿の間に起稿せられたる論文なり。而して延暦十六年に至り、更に之を再治して自ら淨寫せられたるもの、即ち此の卷なりとす。大師は延暦十二年に初めて得度し、法名を空海と定められたりといへば、此の卷は大師の得度後四年、即ち二十四歳の時の筆なるが如し。由來豐野指歸は、序、藍毛先生論、虎亡隱士論、假名を見論、觀無常賦、生死海賦の序三論二賦より成るものにして、即ち大師が孔子老子釋迦の三教を比較研究したる結果他の二教に比して佛教の道かに優れるを確信し、其の意見を著述したるものなり。其の文に關しては既に諸佛家の評論したるものあれば、今また茲に贅せず。

大師の書は、初めは専ら王右軍の帖に就きて學ばれ、又典藥朝野宿禰眞魚養に從ひて運筆の法を正され、且眞楷の法を傳へられたりと説あり。此の卷は大師晩年の諸作に比すれば、未だ熟せざる所あるは勿論なれども、筆力の勁健にして蒼潤なる、墨痕の淋漓として精采ある、また大に筆法を重んじて徒に字樣を矯飾せざる、觀來り觀去りて何人か感嘆推服せざるものあらむ。而して其の字體の彼の清朝の内府に在りしといへる集王千文、又は大師後年(天長年中)の作に係る綜藝種智院式中字體と頗る相似たる所あるは奇といふべし。兎に角二十四歳の弱輩にして此の大作を出す、眞松既に凌雪の精ありといふべき也。此卷久しく野山の秘庫に在りて容易に人の窺ふを許さず、隨て來た會て摹勒したることあるなし。然るに今阿斯道の爲め特に本會に對し其の撮影複製を承允せられたれば、本號以下逐次連載して其の首尾を完すべく、爰に臨池家多年の渴を醫するを得るに至れるは、實に本會の欣榮とする所なり。(天風生)

◎道風朝臣筆秋萩帖(第三卷第六)

釋文

遊・面・能・可・氣・乃・可・悲・度・々  
之・天・和・我・留・東・毛・故・悲  
川・禮・車・安・可・春・見  
者・難・能・意・呂・乃・美・留・面  
安・久・未・轉・弊・末・新・可・波  
雲・久・散・羅・末・之・難・爾

◎平業兼筆歌仙切

平業兼の筆に係るものには、三十六人家集全部、春日切、巻物切、詞花集六半切等あり。さて此の歌仙切は、信實の畫ける三十六歌仙の像の上に書かれたるものなり。世に傳はれる歌仙切には、後鳥羽院天皇宸翰、俊忠、俊成、後京極、爲家等のものあれど、これは其の畫の最も優秀にして古雅なるを以て、世に貴重せらるゝ也。余の管見は、いまだ四五葉に過ぎざれど、なほ諸家に秘藏せらるゝものありと聞く。悉く之を蒐集せば、歌仙の半數以上に達せんか。(周魚記)

◎大燈國師眞蹟

崇山大德寺の開祖大燈國師(宗睦妙超)は本邦の高僧中稀に見るの偉人にして、其の墨蹟の如きは超然凡を抜き、一見其の高風を仰慕せしむるに足るものあり。本號掲ぐる所の國師の眞蹟は、世外井上侯の遺愛品にして、元來雙幅なり。眞珠毫に秘藏する國師の墨蹟は暫く描き、此の眞蹟の如く大字にして而も筆力の豪壯なるは、他にこれを見ず。國師墨蹟中の逸品と稱すべき也。南嶽七十二峰。華頂萬八千丈。瞻之無際。仰之無垠。以此無窮。用祝聖明君。本誌改卷第一號の發刊は、偶立太子の盛典を擧げさせ給ふの時に際會せしを以て、聊か祝意を表せんが爲め、特に此の墨蹟を採りて本誌に掲げたり。若し夫れ國師の墨蹟に就ては、嘗て本誌に水戸徳川侯の裝藏に係る國師の墨蹟を公にしたる際、欽堂詞兒が執筆せられたることあれば第一卷第九號を看よ。茲には之を略し、唯だ國師の高徳の一畫を

窺ふに足るべき一二項を左に載録すべし。  
國師は建武四年十二月二十二日「嚴新佛祖吹毛常磨、機輪轉處空咬牙」との偈を書し終りて筆を擲ちて入寂せり。當時渡東の名僧大鑑禪師（清拙正澄）兩禪に在り、此の遺偈を聞きて感嘆して曰く、意はざりき此の如き明眼なる宗師の日本にあらんとは、生前に一たび會見せざりしを恨むと、自ら茶里處に赴かんと欲して朝事の爲めに果さず、乃ち大衆を率ゐて山門に出で、諷經し、更らに權闍の二侍者を遣し瓣香を贈つて慇懃に弔慰せりと云ふ。  
興禪大燈國師の號は花園上皇の賜ふ所にして、後醍醐天皇も亦深く國師を寵せられ、高照正燈國師の號を加賜せられたのみならず、重ね勅して田を賜ひ、大徳寺を擧げて南禪上刹と相並びて祝聖の道場となし給へり。其の後靈元天皇は貞享三年に大慈雲匡眞國師、櫻町天皇は元文三年に弘鑑常明國師、また光格天皇は天明六年四百五十年の遠忌に方り圓滿淨光國師と何れも加諡せられたり。これを以ても國師の德の如何に高大なるかを仰くに足るべき也。（天風）

●細井廣澤眞蹟西湖十景

世人の多くは書家として細井廣澤を知る。彼は實に元祿時代に於て、御家流の末弊を一洗せんとして所謂唐様の鼓吹に力めたる唯一の大書家なり。然も彼は獨り書道の妙を極めたるのみならず、經學にも通じ武藝にも達し、其の人格も亦高潔にして、當時多く見ざるの大人物たりし也。彼は青年より程朱の學を修め、王陽明の説を悦び、百家に通貫して淹雅博聞、傍ら騎射劍槍の術より天文算數の法に至るまで造詣せざるはなく、兼て圖書及び詩歌をも善くしたり、左れば人許すに國器を以てせり。然も成な書名に掩はれて、世人の多くが書家としてのみ彼を知れるは洵に惜むべきことなり。

廣澤名は知慎、字は公謹、廣澤は其の號にして次郎太郎と稱せり、京都嵯峨の人、年十一江戸に出で、儒を阪井漸軒に學び、又書法を北島雪山に受く。一たび河越侯に仕へて大に擢用せられしも、歳に達して致仕し、後また遂に仕へず、精勵刻苦、書法を修めて紫微字樣、篆體異同歌、觀鸞百調、撥盤眞詮、管城二譜等を著はし、大に文衡山の書法

を鼓吹したり。享保二十年十二月七十八歳にて歿せしが、明治三十年四月 先帝陛下には彼の志を追念あらせられて從四位を贈らせ給へり。以て翁が尋常一様の書家にあらずしを知るべき也。

●頼家三兄弟眞蹟書簡

曰く春水、曰く春風、曰く春坪、これ藤澤の學職頼家の三兄弟なり。父を亭翁といひ、兄弟ともに博學にして、詩書また當時の文壇を壓せり。  
春水名は惟寬、字は千秋、一の字は伯栗、春水はその號、また菴崖、拙菴、和亭等の號あり、通稱は彌太郎、越州竹原の人にして實に山陽の父なり。人と爲り峻整にして、妻子と雖も未だ嘗て其の情容あるを見しことなしといふ。藤澤に仕へて儒員となり、文化十二年二月歿す、享年七十有一、程朱の學を發揮するの傍ら詩書を嗜みて大に見るべきものあり。著す所負劔志、師友志、一得錄、在津紀事、在江紀事、竹原文集、春水遺稿等あり。

春風名は惟強、字は千齡、春風は其の號にして、春水の弟、春坪の兄なり、父の命に依りて醫業を郷里竹原に營み、終身隱居して仕へざりき、然も篤學にしてまた詩書を能くせり。文政八年歿す、享年七十有九。

春坪名は惟柔、字は千嶺、春坪は其の號、萬四郎と稱す、春水の弟にして山陽の叔父なり、經術に長じ、書及び詩を善くせり。春水に後る、こと五年、擢でられて藩の儒員となり、春水と同じく學政を治めたり。晩年郡令となり、大に治績を擧ぐ、天保五年五月歿す、享年春風と同じく七十有九。

●龍沙開寶に就て

本號に掲載したる三人の書簡は、何れも其の執筆の年代を詳にせずと雖も、兄弟ともに書に工みなりしことは之に依りて其の一斑を窺ふに足るべし。（天風）  
不折中村君は十水五石の暇、書學を研究するを以て無上の

樂とし、善本に遇へば千金猶これを吝まず、蒐集せし所の碑帖、今や積んで殆んど書庫に溢れんとす。而して近時更に先人肉蹟の比較研究に力を致し、其の材料として蒐集したるもの、漢魏より隋唐に涉りて其の數既に三十種の多きに達せり。斯道に志の篤き、君の如きは當代稀に見る所に於て、洵に欽仰の至りに堪へざるなり。

左に列舉したるは即ち不折君の藏品にして、悉く敦煌石室の發掘に係るものなり、左れば君は此等の零冊を收めたる秘篋に題して「龍沙開寶」といへり。嗟千古の下に生れて昔人と相見ざるを得るは、一に筆蹟の賜なり、而して君は今や此の秘篋を開きて幾多の墨寶を吾人の眼前に開陳し、以て研究の資料に供せらる、吾人の幸福これより大なるはなし。因に左の分類並に書寫時代の推定等は皆不折君の説に基くもの也。

○漢 永壽二年 甲乙二種

甲者は漆書にして全文二百餘字、其半は漫滅す、決裏福門文は漆書（本誌第五卷一、二、三號掲載）  
乙者は朱書にして全文八十餘字、漫滅せしもの數字に過ぎず、天帝使者告地下二千石は漆書。

○晉 摩訶般若波羅密經（本誌登載）  
二樂莊所藏の元康六年經、建初七年經及び流沙陰簡中の永壽六年簡等と筆法書風相合せり、依て齊宋間のものと推定す。

○齊 佛說觀普賢經（本誌登載）  
永明元年正月比丘尼釋法慶供養

○北魏 護命身經  
正光二年信士張阿宜寫

○同 大般涅槃經卷十五（推定北魏）  
根法師碑、李超墓誌等と書風相合す。

○同 法華經本事品（推定北魏）  
刁遵墓誌、高貞碑等と書風相合す。

○同 章草經疏（蕭紙、推定北魏）  
流沙陰簡所載の晉代草書と書風相似たる所あれども、

彼に比すれば稍後代のものと覺ゆ。

○西魏 妙法蓮華經第四

- 西魏廢帝元年辛興升供養
  - 同 妙法蓮華經比喩品(推定西魏)
  - 筆意頗る陶件虎の所胎經等西魏の諸經に似たり。
  - 東魏 雜寶藏經(推定東魏)
  - 筆致酷だ王僧纂誌及び李仲璇碑等に似たり。
  - 隨 大比丘彌沙塞戒本
  - 開皇元年比丘曇雅寫
  - 唐 尊勝陀羅尼 永昌元年
  - 同 法華經普門品
  - 天册萬歲元年張萬福供養
  - 同 般若波羅密多心經 開元五年
  - 同 佛名經第二第六及斷片
  - 梁貞明六年、卷頭に阿彌陀如來の畫像あり。
  - 同 禮讚文
  - 周顯德二年僧辛願進記
  - 同 法華經(推定初唐)
  - 同 道經(推定唐)
  - 同 法華經普賢菩薩觀發品(同上)
  - 同 同序品(同上)
  - 同 灌頂拔除過罪生死得度經(同上)
  - 同 法華經玄贊卷四(推定初唐)
  - 同 同卷八(同上)
  - 同 同義決(同上)
  - 以上三種は既に本誌第三卷八、九號に掲載せり。
  - 同 金剛經歌(同上)
  - 同 金剛經(推定唐)
  - 同 大般涅槃經(同上)
  - 同 戒律(同上)
  - 同 思益梵天所問經(推定晚唐)
- 以上三十種のうち漢の永壽瓶の漆書、初唐の法華經玄贊卷四、卷八及び同義決の四種は既に掲載せり。而して本誌に掲載せらるるは第一晉の摩訶般若波羅密經第二卷の佛說勸普賢經の二種なり。魏以降のものは逐次其の影本を掲載すべきにより、依て以て比較研究せられんことを望む。(天風記)

●海粟道人眞蹟詩幅

海粟道人の名を以て知られたる馮子振は元人にして翰林學士たり。中峰明本及び趙子昂等と交友甚だ深く、其の書亦頗る妙趣あり。左の一篇は眞名松翁が本書の後に題したるもの(原漢文)、意譯して以て解説に代ふ。(天風記)

海粟道人の書、横幅一百五十字、蓋易元吉畫卷の後に題せしもの也。萬姓統譜に曰く、子振の文を爲るや、酒酣にして耳熱するに當り、侍者二三人に命じ、筆を調して俟たしめ、案に據りて疾書すと。今此の書を觀するに、健熟の筆を以て草々に堪へざるものあり、落筆の態想ふべし。又劉環書畫史に云ふ、海粟は書名を以てせずと雖も、筆法又劉環書畫史に云ふ、海粟は書名を以てせずと雖も、筆法宗山谷に似たりと。今此の幅を觀るに信に稱り。又東坡詩抄小傳に、王阮亭蘇談記を引きて曰く、中峰の草堂は馮海粟泥を練り、趙松雪これを搬運し、中峰自ら壁に塗れり、吳人傳へて以て雅談と爲すと。其の松雪と觀遊せしこと此の如し、而して其の書法毫も法傲の意なし、亦以て其の人と爲りを見るべし。平日余宋元已來の名蹟を覽ること尠からず、其の筆力遒勁、神韻爽快、これに似たるものを求むるに甚だ稀にして、眞物固より遇ひ易からざる也。

●頌鼎銘四種(高田竹山釋文)

鼎  
 祀白敏又作教  
 孫永寶  
 武生投承下  
 其差鼎  
 子孫永  
 寶用之

●蘇東坡草書後赤壁賦

蘇東坡草書後赤壁賦(第六卷第二號)

余は本誌が發刊以後、墨本類に於て小字に中字に、端正且つ温雅の法書を載すること少なからざるを欣ぶと雖も、未だ豪壯雄偉の迹を掲げざるを遺憾とせり。故に今卷を改むるに際し、余は此の帖を採選せり。此の帖惟堂蜀油君が自ら藏して自ら許さるる所なれども、余は敢て其の眞に東坡たるを東坡たらざるを問はず、苟も自ら筆を執つて書するもの、一過眼せざる可らざるものたることを信するなり。此の帖後賦の末に於て尤も雄偉にして豪壯なる迹を見らる。筆力の健快飛動せるは、全く羅池廟筋子丹碑の迹と一致せり。余輩自ら書するに當り、先づ通覽一過せんか、傍に劍舞せしむるの儀なくんばあらず。即ち是れ此の帖の凡ならざる所以にして、坡公の迹と謂ふも敢て不可なかるべし。

余嘗て坡公の眞迹と稱する一巻を見る。實は別人が粉蠟筆に摹せる雙鈎填墨本なり。自ら摹して今も之を藏せり。其の卷の迹は此の帖の如く豪壯の氣に富まざるも其趣は相同じ、而して兩者とも極めて軟毫を用ひたること亦相同じ。

登嶽  
 佳王九月既望  
 遺中令今穿新  
 洞中莫辨田穿拜  
 對場遺中休用乍  
 朕文考登嶽陵  
 高其孫子其永寶

余は曩に其だこれを怪みたりしが、今此帖を合せ考へ、又此の帖の朱跋に坡公雞毛筆を用ゆと見へたるにより、先の疑は氷釋せり。雞毛筆を用ひて、此の金剛銳利の筆力を現はす、是れ坡公の新意を出して古人の迹を踏まざる所以を知るに足る。果して然らば文章家が後賦に疑を懐くものあるも、其の疑問も亦自ら解決せらるべし。

さて坡公は何故に雞毛筆を使用したか、是れ一の研究すべき問題なりとす。何にせよ、彼の天材の縱横無盡なるは何れの方面に向つても發揮汪溢せざるはなく、書に於ても亦然らざるを得ず。

後人が東坡は懸腕を能くせずなど評すれども、是れ一片の皮見よりする妄評にして、彼の枕腕單苞を主張せしは、畢竟當時の書家者流を愚弄せし惡戯のみ。彼は當時世人が墨竹を寫すに反して朱竹を作るの法を創めたり。然るに人あり問ふて曰く、墨竹が何處に生ずるか、彼の漫戲は往々これに類するものあり。左れば世の書家が懸腕雙苞にあざれば善書を作る能はずといへば、彼は反對に枕腕單苞に限るといへり。而して尋常の書家は枕腕單苞にては十分力の入りたる書を寫す能はざれども、坡公自身は枕腕單苞にて、猶且つ他人の懸腕雙苞以上の力ある字を書き得たるなり。由來天材の人の仕事は機用になり過ぎる傾向あるものにして、餘り機用になり過ぎると共に、自然雅味を失するは技藝上の通則なりとす。坡公が使用し難き中にも亦自ら妙味を存する所の雞毛筆を愛用したるは頗る面白きことなり。

我邦人中にても貫名海屋などは随分粗惡なる筆を使用したり、彼も亦天材にして加ふるに良工苦心を以てせり。元來惡筆を使ひこなすことは操縱法の神髓にして、畫家にも渡邊華山の如きは常に粗筆を使用したり、而して彼の筆致はまた格別なるものあり。彼れれ合せ考ふれば、坡公の雞毛筆に於ける問題に能く觸るゝのみならず、篤と此の帖を玩味するに於ては、明かに其の然る所以を發見し得べし殊に橫筆連疊の所に注意せよ。歴然として毛剛の剛柔不調和なる痕迹を認め得べし、然るに其の不調和なる筆尖を少

しも意とせず、縱横無盡に使用して宛も豪毛の如くならしめたる坡公の手腕に至りては驚嘆せざるを得ず。此の如きの技倆は到底凡筆の企て及ばざる所にして、余の此の迹を觀て坡公の眞蹟なるべしと辨する所以のもの亦實に此にあり。然れども奇迹の評に就ては人々其の所見を異にするが故に、尙は會員諸君の高示を待つこと切なり。(竹山)

#### 楊文聰山水

楊文聰字は龍友、貴州の人、金陵に流寓す、萬曆の末、鄉黨に由りて兵部郎となる、人となり豪俠、頗る名士を推獎す、士も亦た此を以て之に附す。善書能畫、文藻に工なり、殊に其畫、宋人の骨法を披き、元人の風流を蘊ひ、董其昌曾て推獎措かず、目して勁响となす。清兵江を渡り、留都陷るに及び、龍友同志と恢復を謀り、江南各處に潛遊す、唐王福州に建藩するに及び、龍友をして衢州を授けしむ終に清兵の獲る所となり、降らずして戮せらる、其大節慨然、儒夫をして立たしむるの概あり、惟姦臣馬士英と姻婭たるを以て、死後旌蓋を得ざりしを憾となす。此の帖、水墨もて冷金箋に山水を一灑す、款題少しく弱に似たれども之れ紙質の然らしむる所、畫致に至りては、甚だ董玄宰に肖たるものあり、之れ風氣の然らしむるもの、又た先生董宗伯に負ふ所あるを見るべき也。(立太子式前一日、勅人達跋)

Arabic calligraphy in a semi-circular frame, likely a title or decorative header.



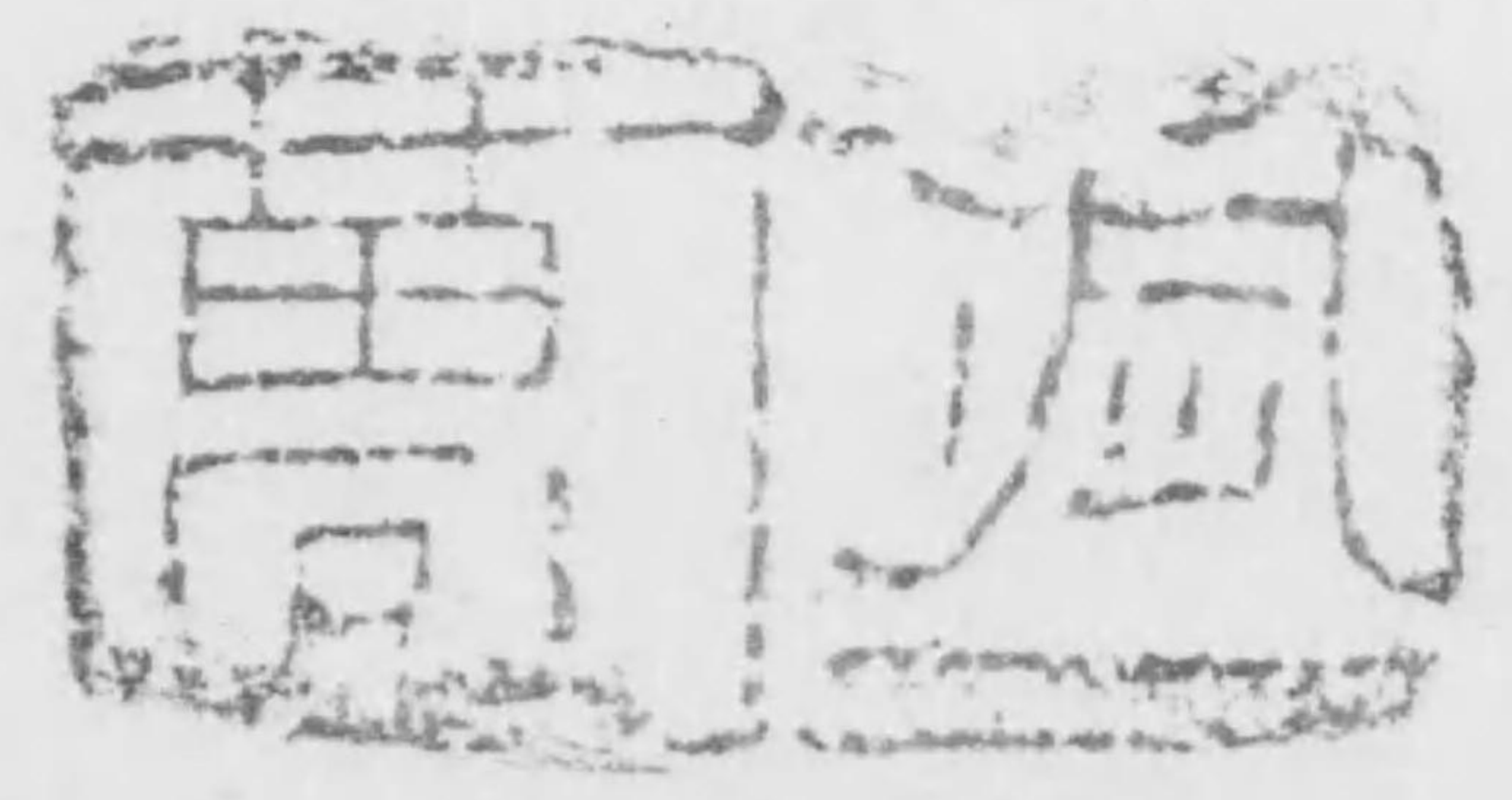
Two Chinese characters in seal script, reading '周風' (Zhou Feng).

Arabic calligraphy in a semi-circular frame, likely a title or decorative header.



Two Chinese characters in seal script, reading '周風' (Zhou Feng).





九曜右左の家の家代海風

年蓋藏

あゝ〜のき〜の〜とわは  
うらやむい〜な〜みせ  
おと〜

龍虎尊信錄卷

并序

雨霽霽，待兔兔，雜是以翻  
丹鳳翔，必有由，晚，希  
龍虎係來格，是故詩人，或

龍舟擊楫歸下卷

并序

鬻龜毛先生論

虞士隱士論

假名乞此論

觀無常賦

生死海賦

夫烈飈倏起，  
淫虎嘯暴

雨霽霽，  
待兔難是，  
以翻

丹鳳翔，  
必有由，  
既，  
希

龍威像來格，  
是故詩人，  
或

借宴樂以奏娛意或懷惠  
吟而賦身愛以視賢德以馳  
褒長讚惡思惡而飛誠箴之  
人有工拙詞有妍蚩曹達之  
詩未免齟齬沈休之筆狂  
多病果復有唐國張文成  
者散芳華詞貫瓊玉筆翻  
窈窕鳳但恨濫修滄事曾無  
雅詞句卷舒紙柳下興歎  
臨文味句桑門管動本朝  
日雄人迷睡覺記朦辯巧貴  
詭言雲敷遙聞彼名尸居  
之士拍掌大笑僅對其字

柳之田此の業乃こ此の度  
カケル和系為東も古忠  
之末一雅公年一安の事古見

川社波

志難地言るは乃美有面  
安久事持集事村の波  
言る久叔雅来つ一雅尔

能宣朝臣

ちりせきてかきれる松をしろ  
まはるるまはるるまはるるまはるる  
い



南嶽七十二峰一華頂峯  
文瞻之無際仰之無切以  
安月祝 聖 的 天

南嶽七十二峰一華頂芙蓉  
文瞻之無際仰之無切以述其  
遊月祝聖的矣





出遊正流此孤山界  
頃此王竺解舟鏡波  
意所之與至以奉大  
經身頃刻主就題



西湖十景

張寧字靖之號方

洲天昨寫為諫官

英宗稱多我張寧公

歸田雅好山水素一

再至杭州而教樣親用

出遊西湖詩孤山吊岳

墳此之笠笠作舟鏡後信

意所之與之同奉大篇

短身頃刻之就題





物有於上  
此乃其意  
名也如之  
以復其  
し其意  
本下其  
各其

其意如之  
此乃其意  
名也如之  
以復其  
し其意  
本下其  
各其  
其意如之  
此乃其意  
名也如之  
以復其  
し其意  
本下其  
各其

此乃其意  
名也如之  
以復其  
し其意  
本下其  
各其  
此乃其意  
名也如之  
以復其  
し其意  
本下其  
各其

其意如之

此乃其意  
名也如之  
以復其  
し其意  
本下其  
各其  
此乃其意  
名也如之  
以復其  
し其意  
本下其  
各其

其意如之  
此乃其意  
名也如之  
以復其  
し其意  
本下其  
各其

其意如之  
此乃其意  
名也如之  
以復其  
し其意  
本下其  
各其  
其意如之  
此乃其意  
名也如之  
以復其  
し其意  
本下其  
各其



如般若波羅密初品中說佛入三昧王三昧  
送三昧起以天眼觀十方世界舉界毛孔  
嗟其足下千輪相輪放六百千萬億  
色光明足指上至內結氣；名放六  
萬億種；色光明普照十方無量九數如  
河沙等諸佛世界皆令大明佛祿宣亦一切  
諸法實相新一切眾生起結故說摩訶般若  
波羅密經後以有愿取見人懷嫉妬意謂  
言佛智慧不出於人但以幻術或立新波貢  
高取憍意故現無量神力無量智慧力於朕  
著波羅密中自說我神德無量三界特尊為  
一切護護善哉一愿念後無量善一信  
受人天樂天得涅槃果後以令人信受法  
故言我是大師有十力四无取來安立至主  
住兼心得自在能降于此轉妙法輪於一切  
軍尊軍上後以佛世尊欲令眾生歡喜故說  
是取若波羅密言法善若應大喜何以故一  
切眾生入取見細為異學志願取我取一  
相意願取細中得十力大師難可值見法  
今已遇我隨時用盡十七品等諸法藏悉  
法持取後以一切眾生為結住病不煩怙无  
始生死以素天人能治此病者當為外道意  
願取我今出去為大醫王集諸法藥沙等  
當取是以佛說摩訶般若波羅密經後以有  
人念言佛少人同亦有生死實受飢渴寒熱  
老病苦佛所新波意故說摩訶般若波羅

懺悔第四懺悔者於六齋日勅諸境內力所  
及處令行不教備如此法是名備第四懺悔  
第五懺悔者但當深信因果信一實道知佛  
不欺是名備第五懺悔佛告阿難於未來世  
若有備習如此悔法當知此人著慙愧服諸  
佛護助不久當成阿耨多羅三藐三菩提說  
是語時十千天子得法眼淨弥勒菩薩等諸  
大菩薩及以阿難聞佛所說歡喜奉行

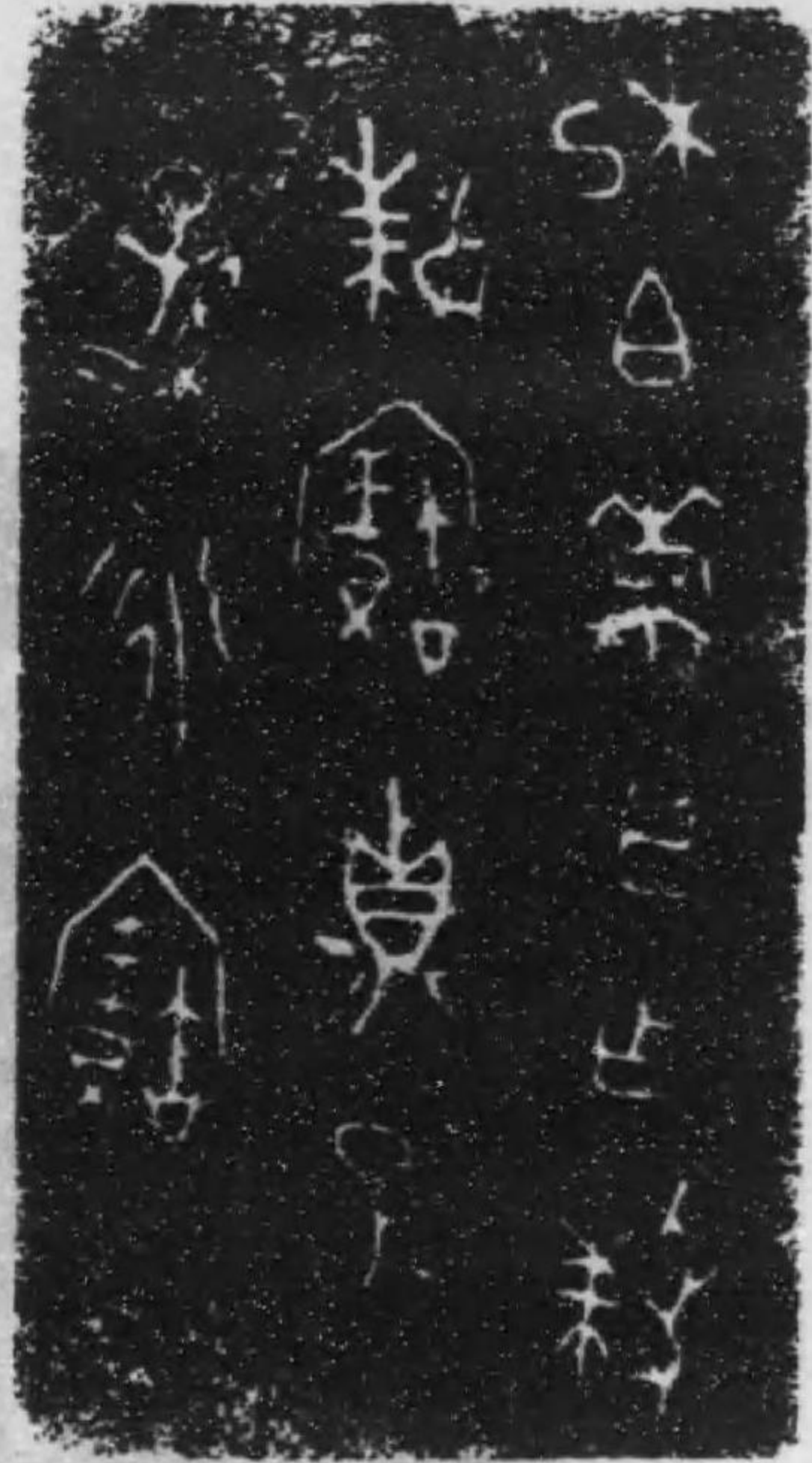
佛說普賢經卷

永明元年正月謹寫用錢十段  
比丘左擇法敬供養



生息活動心花舞  
一得青黃若箇邊  
說與畫師曾水鏡  
寫真圖上十分妍

鼎盖



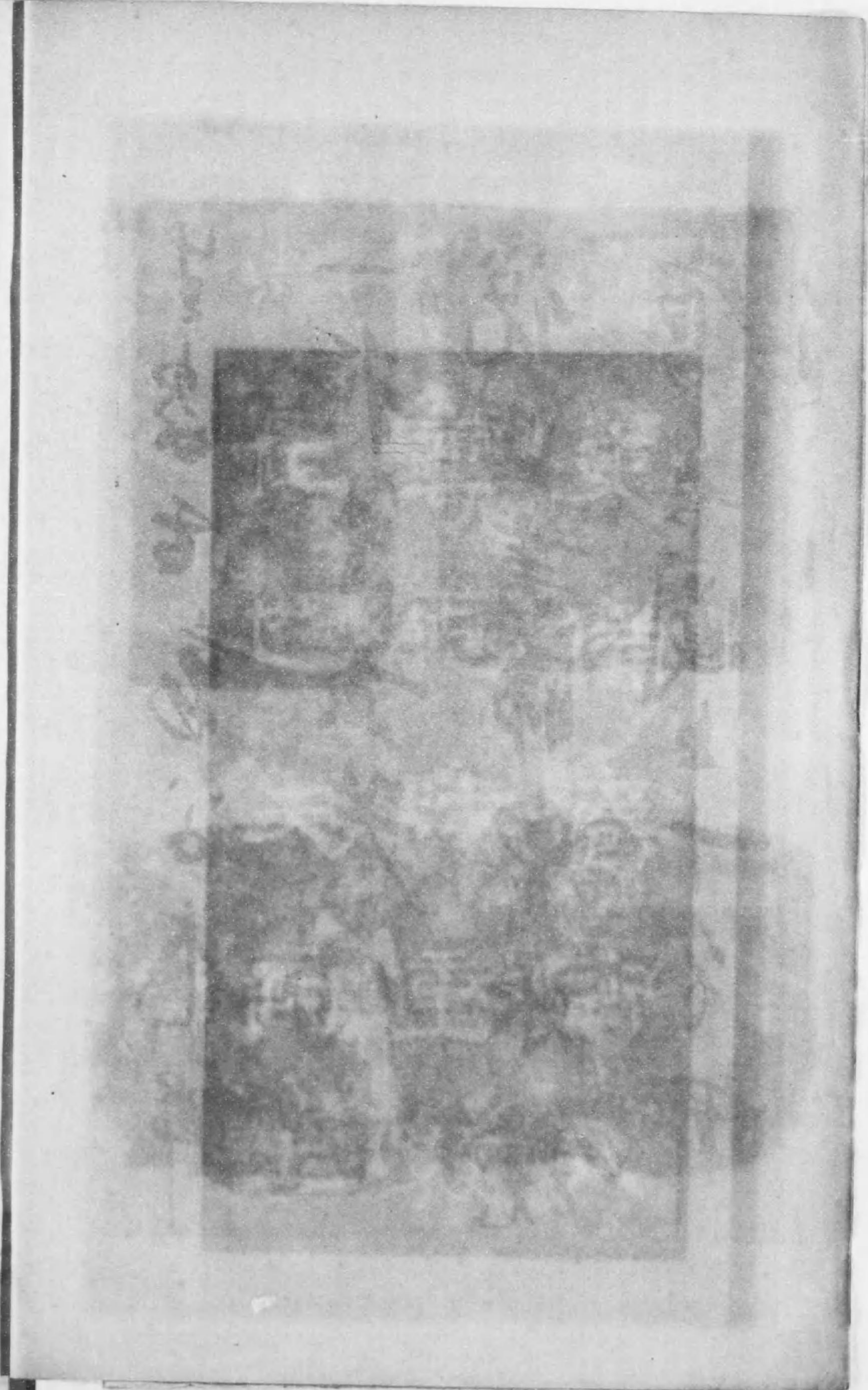
殷墟做鼎



羞鼎



宰鼎





珠璣  
既  
珠璣  
既

國臣伏見臨  
屏靡曰祠孔  
以夫宰長

吏備爵所以  
尊先降重教  
化也夫封志

辛  
既  
珠璣  
既

後  
未  
歷

賦  
是  
歲  
十

二  
客  
洗  
予  
過

黃  
泥  
之  
坂  
霜

刻本

露既降

月之望

白露

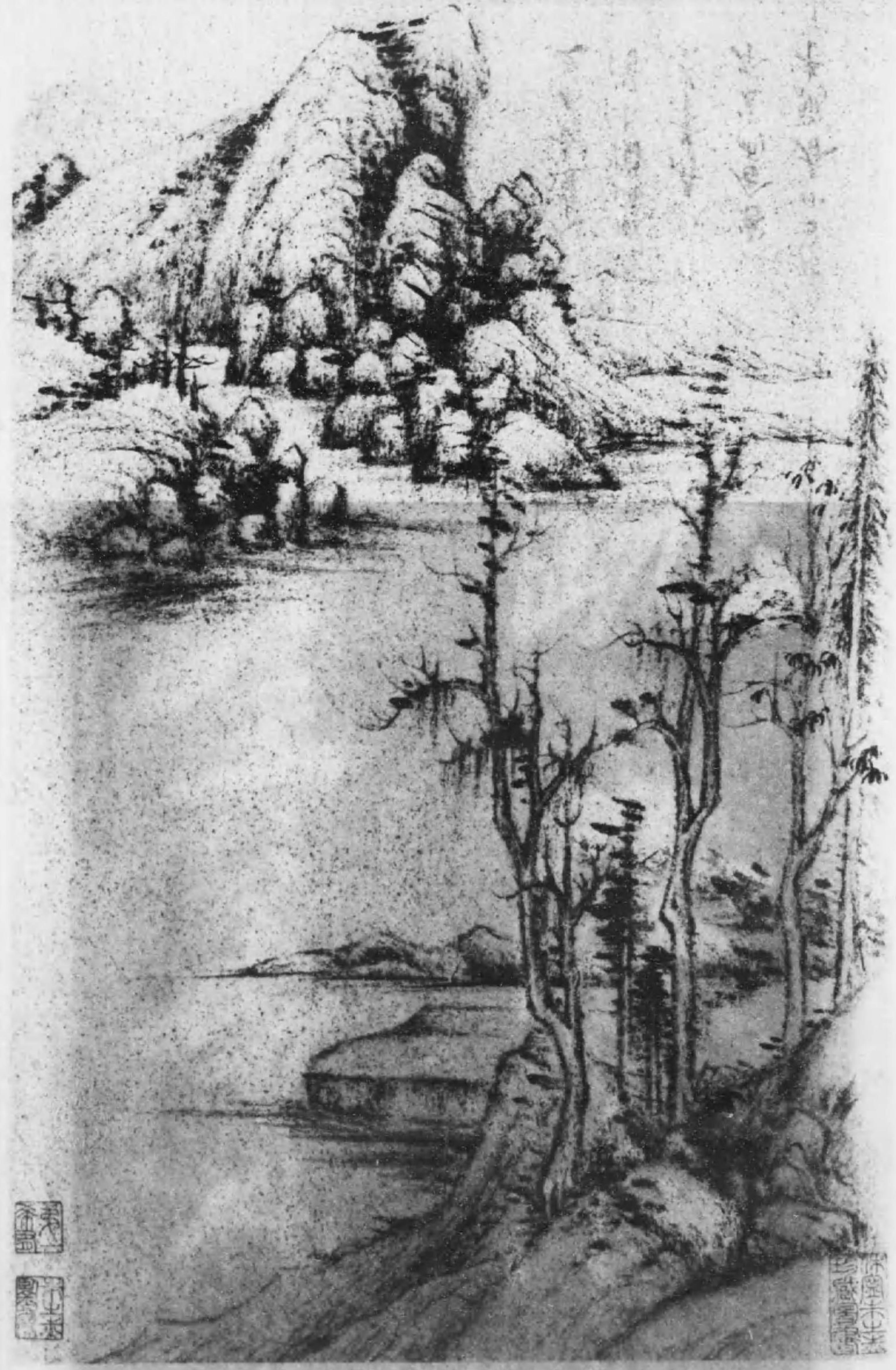
歸於臨

庚子小春寓半  
塘客舍雨定岑  
寂我弄筆墨  
遂成此幀未得  
古人遺意不足  
留也

文魁



春寓半  
雨定岑  
竹華雲  
懶未得  
意不足



凡心  
無  
極  
矣





書道研究 美字 蕭美 一編 大正五年十一月五日

第七卷開卷辭

去の明治四十四年 先皇天皇の佳節に際し、書苑が遷矢差張を門楯に  
懸けしより、書道研究を著るること六周月、境を閱すること六十愛に第七卷第  
一葉を刊布するを得るの域に達せり。  
爾より書道の邦隆今日より熾なるは莫かるべし、昔日に在りては、之れを  
學ばむと欲する志なきにあらざるも、其の身遊歴に僻在するの士は、良師  
に遇し、名蹟に接するの機なきが爲め、獨習固陋を免るること克はず、復た  
躬親しく、蘭圖の裏に獲得したりとすも、王侯貴人の藏弄する珍蹟は、封  
するに珍蹟の面を以てし、下すに、蓋蓋の繪を以てし、外間の人をして之れ  
を窺伺することを得ざらしむ、斯の如く、良師に乏しく、蘭圖を窺るの機な  
きが爲め、學ばむと欲して、學ぶを得ざるを嘆する而已。  
然るに書苑は、此の難産の極を啓き、魚鱗の編を解き、上は、九重の御物よ  
り、下は名山の藏する所に至るまで、一々影照して、其跡と宛末の爽なき妙  
技を以て之れを讀者の前に開陳し、右より觀むと欲して、窺ふことを得ざ  
りし、蓋蓋をば、容易に同好の技玩に供するを得るの便を啓きたるは、聊か  
吾曹の訪とする所ならずむばあらず。  
吾曹の學ぶの要は、觀し、其蹟墨實に接し、其の筆路と振運とを吟味し、之れ  
を假りて自家の遺書を増進せしむるより外あることなし。されど、唐宋  
元明の眞蹟及び宋元の拓本等に至りては、稀有の罕觀にして、或は偶存在  
するものあるも、之れを鑒別するの識なきときは、名玉をして、賦賦と撰よ  
所莫らしめ、或は眞贋をして、祖傳の堂に上すことなきを、保せず、斯の若き  
は、最も士大夫の苦衷を要する所とす。書苑は、愛に意を用ふることに、懇切  
に、假令傳世の墨寶として、推尊せらるゝ者たりと雖ども、慎重に子細に之

を鑒別して、希くも、蘭圖の存するものは、之を排除して、讀者をして迷宮に  
彷徨する如きこと無からしめむことを、庶幾せり。  
殊に、近來は、支那の内訌に由り、彼の邦の珍蹟の遺棄するもの夥しからず、  
當時にありては、元明名家の蘭圖は、碑版法帖と雖ども、佳節のものを得む  
と欲するに、は頗る至難の事たりしも、今や其の眞蹟は、日に日に、我邦に流  
入して、觀し、吾曹を嘆くことを得るの機會をも得つゝあり。  
殊に、蘭圖の紙氣は、我が邦家に對して、物資の供給を促すこと、稀なるより、  
邦家の經濟は大なる潤澤を得、購買の實力亦、往日の比にあらざるべし、  
蘭圖の家は、幾萬の眞白を抛ち、翠觀の珍蹟を庋架の下に、敢めむと欲する  
もの、事ながら、古より、大方者は、能く、蘭圖の畫を完ふすと、稱せらるゝ如  
く、爾今、珍品の吾曹眼に映すること、愈増多、稀なるに至らむ。  
愛の時に際し、書苑は、六零六十號の大冊を刷了し、更らに第七卷の勢頭  
上ることを得るに至る。吾曹の努力と奮勵は、今後、愈々、紙上に、振舞ひ、書  
道唯一の機關、書道専攻の本源を以て、聊か、任する所あらむことを期す。  
書苑の向上は、獨り、墨蹟神帖にのみ止まらず、吾曹の畫を、畫師の域に、進入  
せり、畫に題贊あり、照會に、即圖あるは、有宋以來の事にして、元の黃吳倪王  
の四家、便々たる、蘭圖と、陶鈔の畫院とを以て、之を前に、唱へ、明詞の畫  
名家、倍之れを、後に、和し、畫面は、題贊に、由りて、一層の光輝を、發揮するに至  
る。然れども、其の、描辭、其の、位置、甚だ、至難の事にして、稍も、すれば、眞蹟  
畫の、讀を受くるに至る、書道に、志すもの、亦必ず、此の、一事を、忘るに、付すべ  
からず、故に、吾曹は、毎號、一張の、有題畫を、挿入して、此の、參考に、資する事と  
爲し居り。  
斯く、萬方に、奔馳して、書道の、開拓を、企畫する、書苑は、更らに、第七卷より、一  
層の、奮勵を、讀者の前に、開陳するに至るべし、請ふ之れを、將來に、査せよ。

# 二十四條用筆法

滑川 清如述

序論にいふ如く、永字八法簡にして要を蔽ふと雖も、是れ頗る覺り難き點寡ならず、故に先づ二十四條を歴舉し、更らに十二意十三訣を説き、末後八法に及ぶべし。

## 一、點法

一點のみ其の法甚だ簡なる如くなるも、此の一點を得むと欲するには、幾多の苦心を須ひざるべからず。王右軍云く、作點之法皆須落筆如大石當衝、又云く、點不變爲布、其要通變也、説く如く此の點法は、眞に力あること大石の衝に當るが如く、傍人をして容易に之れを排去せしむることを許さず、筆を以て紙上に緊結せしめ、頓鋒楮面を劈破するの概あることを要義となす。先づ此の點を作らむとするには、其の用筆は、左に向つて中指をば斜に止め、右に向つて大指をば中指と同様の位置に齊しく頓らしめ、中指と大指と恰も一調一拜報答する如き有様に在らしめ、更らに中指を以て筆鋒を控翻せしめ、其の鋒をば内に向つて按じ、強く之を收むることを主要とす。禁經にもいふ如く、點は利鑽鑿金の如くすべし、とは是れを謂ふ也。幾個の點を作るにも、此の意を以てせば誤りなきに庶幾からむ、惟だ右軍のいふ如く、布基に陥るを嫌ふは、自然毎點をして同一形状ならしめず、個々變化を來さむことを勉むべし、是れ自家用意の一あるのみ。又た打點といふ事あり、之れは單に指を以つて筆を送り、恰かも物を打つが如き勢を似せば宜しとするも、此の法容易に成し行ふべきものにあらず。

## 二、畫法

禁經に、長鋒もて石を界するが如く、又た長舟の小渚を載るが如くすといふ如く、首より尾に至るまで、一筆の凝滯する所なきが如く、平靜に鋒端をば横截せしむることを要す。此の用筆は主として大指に重きを措き、八

法の一筆法或は一勅法を書する如き心持にて運筆せざるべからず、即ち大指を以て筆管を遣り、中指を用ひて筆を鈎し、少しく之れを據覆するかの如き心持にて、速運よりは寧ろ遲運を以て宜しとなす、速なれば筆力輕率の嫌あり、遅なれば力紙背に徹する如き重量を現すことを得故に一畫を書するには、大指の力を須ひて横畫し、盡處に至るに及びて中指を用ひて頓筆せしむるを以て最良法となす。又た位筆法と稱するものあり、此の法たる初めは策法を用ひて緊縛し、中ごろ筆を擡げて軽く動かし、微に勅法を使ふの心地を以て右に向つて按翻することをいふ。頓筆宣示表中の長畫之を用ふるもの多し、概するに此の畫も亦た布基の弊に陥る恐れあるを以て書者は須らく變通を心裏に蓄へ、以て臨紙下筆せざるべからず。

## 三、畫法

此の法は主として勅策二法を用ひ、翰利を以て勝れりとなすものにして、上の一畫は滑鋒平勅し、中は筆を背けて仰策せしめ、下は緊運とて、筆を鈎する位の心持にて趨法を顯現せしめ、す、覆收頓藏せむことを要す。

## 懸針法

衛夫人いふ、懸針は萬歲枯藤の如くなるを要すと、王右軍云く、懸針垂露兼爲體、此の法心手相應し、有意無意の中に於て極致を得べきものにして、他の點畫橫畫等の如く、一定の指授を與ふること甚だ困難なるに似たり。畢竟心手相熟して、自然に大成の域に達するものにて、指筆の形式にのみ拘泥しては、其味を得る容易の事にあらず、然れども亦た用筆の提擧すべきもの無きにあらず、先づ筆鋒をして紙に著せしめ、筆管を擦し、鋒の勢を逐ふて懸筆として速ならず、遲ならず、歩々軌に進ぶの意を以て緊收せば、思字に過ぎなむ。是れ所謂古來書家の喧傳する鐘畫沙の法にして、鐘もて沙を畫くが如く、緊擦靜澀、不即不離の勢を持し、控翻側轉の憂なからしめ、萬歲枯藤の如き緊密なる力量を含蓄することを主とす。王右軍蘭亭敘の年の字、此の懸針を説破して餘りあるものといふべし。

## 垂露法

是れ其の形體に於ては懸針と酷肖するものにして、初學殆むど其の何れが垂露たり、何れが懸針たるかを識別するに苦む如しと雖も、用筆に於ては二者殆むど異體にして決して同一に混同すべきものにあらず。右軍は之れを形容して、宿抽寒谷是也と説けり、其の用筆を釋ぬれば、懸針の鋒光管押と異なり、鋒管一齊に平行し、頓筆として直下筆を止むる處に至り、推控を以て功となす、其の直下の勢は須らく勢筆を用ひ垂れて縮まらざる様心掛けざるを得ず、此の垂露なる一法は象書の垂脚玉筋より出でたるものなり、との説尤も信すべきに近し。(未完)

# 耕書家遊書家

樋口 銅牛

耕書家とは何ぞや。農夫が田を耕して生活するが如くに、書によりて生計の資を得る者の謂也。耕書家に數種あり。紡文家の作れる金石文を筆するものを稍高しとし、招牌題署を筆するものを其次とし、印刷物の版下を筆するものを又其次とす。(寫字生、辭令書きも亦之に屬す)。既に生計のために、潤筆の料を收むるを得るは其の目的にして、書品の如きは問ふ所に非ず。務めて用筆を嫺細にして世に容れられむことを求むるは、自然の勢にして、顧客の多少は、彼等に取りては、寧ろ榮辱の繫る所大なるかの如き成なくばあらざるべし。

勞働は神聖也。吾人豈敢て勞働を賤しむ者ならんや。聞説らく、歐米人は、人のために無償の勞働をなすを最も恥辱とし、奴隸遇せらるゝものとして、無償の勞働をなすを屑とせず。耕書家の書を學ぶにも、多少の苦心を要し、練磨を要し、習熟を要す。師を擇びて之に就き、法書を求めて之を臨す。彼等も相當の學資を捨て、相當の年月を之が爲に費したるに相違なし。即ち學成りて後之を業とするは、法學者が法官辯護士となり、醫學者が病院を開き診察に従事すると、毫も異なることなし。書に依りて

生計を立て潤筆を得るを敢て不可なりとはせざれども、人のため、に字を書す。此れ動もすれば自己の没却せられ易き所以にして、求むる所外に在りて、内に在らず。其書の氣品の高尚は、遂に求め得べくも莫し。徒らに整齊を以て美なりとし、傳粉を施して姿態の面目に留まらむことを求むること、娼婦と相似たるものあり。變化なく、豪勁峭拔の氣字なく、棋手徒らに枰面に布くも、突兀の觀なく、傾危の看なし。大道の坦々たるは、人車の往還に便なるが如く、世に耕書家の存在するは、是れほど便利なるは、莫く耕書家の存在は、世に最も必要なれど、必要なるが故に、耕書家の書を貴しとは斷じ難かるべし。美と必要とは元來没交渉なれば也。遊書家とは何ぞや。書を遊戯として自己の美意識の満足を得ば足れりとし、敢て人に容れらるゝを以て念とせざるもの、謂にて、搢紳士大夫乃至文墨家の乘輿揮洒する所のものに屬す。蓋し文章は遊戯の具に非ざれども、亦之を遊戯の具とし得べきが如く、書も元來は實用の具なれども、亦實用以外の遊戯の具ともなし得べきなり。實用以外、即ち必要以外に、審美眼の權域は存するものにて、自己満足は、品性の表現となりて、人格の表示ともなり、他の模倣し得ざる神品も、逸品も成るものなり。孔子が藝に遊ぶと曰ひたる意は、確と推測し難けれども、吾人が此に用ひたる遊戯なる文字の意味は、通常に用ひらるゝ意味とは少しく異なる所あるべし。蓋し普通に言ふ所の遊戯の意味は、戲弄玩弄の意味なれども、吾人の所謂遊戯の意味は、物質を超脱せる精神上の意味にて、英雄首を回らせば即ち神仙。拘泥せず。執著せず。書に臨みて書を忘れ筆を執りて筆を忘れ、鞍上人なく、鞍下馬なきの境に心を遊ばしむるの謂にて、蒙叟が所謂逍遙遊の遊也。蒙叟は又之を指して物化と曰へり。則ち遊戯も三昧に入らざれば、未だ以て遊戯とするに足らず。法書だ筆法だ何だ彼だと思ふもつかぬ拘泥の見を去らざる間は、焉んぞ以て共に遊戯の書を談するに足らむや。而して此れ遊書家の能く企て及ぶ所ならむや。耕書家は書の奴也。書に役せらるゝもの也。遊書家は書の主也。書を役するもの也。此を之れ耕書家と遊書家の分なりとす矣。

唯夫れ天分高き人にして筆に神遊するを得べし。天分の高からざる人も修養練磨の功を積みては、或る程度までは神遊の域に達し得ざること非ざれども、妙境に到らむことは猶尙未だし。然らば則ち古來眞に善く筆に神遊し得たる者幾人ありや。曰く。幾人もあることなし。強ひて指を屈すとも、和漢古今を通じて二十人には過ぐべからず。字を書することの難きがために非ず。實に天分高き人の得難きがため也。是の故に世の筆蹟を觀て以て鑑賞を滿たさむと欲する者は天分以外何物か之に代るものを得て、其の足らざる所を補はむと欲す。王公指紳士大夫の筆蹟未だ以て神遊の書なりと斷するに足らざるも、世人が往々之を貴重視するは、則ち之がために、其の王公指紳士大夫といふ地位聲望はたとひ書に於ける天分の足らざる所を補ひて餘りあらざるまでも、僅に足らしめ得ざることあらじ。敬慕するに足るべき人品を具有せる人の筆蹟の貴重せらるゝも、亦畢竟は之がためなるのみ。而も事功其他の一面に於て天分の高き人は、亦往々書に於ける天分も高きものにて、書奴の書に比しては、眞に見勝りするものなり。

天分の高しと曰ふも程度の問題なり。天分の卑しと曰ふも亦程度の問題なり。此と同時に、書に遊ぶと曰ふも亦均しく程度の問題にて、善く遊ぶと善く遊ばざるとの區別こそあらめ。遊ぶといふ字に二つはなく、たとひ善く遊ばざるも、苟くも遊ぶに志ある以上は遊ばざるものとして全く排斥し去らむは、酷ならずとせじ。故に天分に等あるが如く、書に遊ぶにも亦等ありと做して、鑑賞には幾分の手加減あるを要せむか。乃ち耕書家も亦時として遊書家たる能はざることもあらざるべきも、編墨の見を去らざる限りは、自家の書を筆せむことは遂に覺束なかるべし。普通人の書は須らく俗なるべし。俗ならざるべからず。俗とは則ち通俗の謂にて、普通一般といふ意味に外ならざれば也。耕書家の書は須らく格法嚴正なるべし。格法嚴正ならざるべからず。此によりて報酬を得活計を立つるものなれば也。遊書家の書に至りては、唯其の遊戯精神の發露にして、外より之を牽制せむとするもの何物もあることなし。神

旺んに筆隨ふ。唯此れのみ。此れのみ。(元)

### 北京を背景とする書の價值(下)

後藤朝太郎

北京方面に在る碑の見事なのは清朝に入つてからのもので、多くは康熙乾隆あたりのものである。碑文として面白いのは滿漢對譯のもので、碑の形式の方になると唐の様式を傳へ、宋元以來ただ舊形を繼承して居るだけで何等進歩の跡も見えない。然し碑の數に於て、又碑文の性質に於て、誰しも能く注目して居るものは北京文廟の榜に在る國子監の石經や各種の碑であらう。國子監は乾隆五十年に辟雍即ち天子の大學の設置された所で、其の後堂には康熙乾隆以下歴代の天子の御筆が澤山あり、堂の右方には石造の日時計が安置され、又辟雍の中央には嘗て乾隆帝の臨幸せられた時の玉座が汚いけれども昔ながらに設けられてある。而して其の辟雍の東西兩廡には數十の碑が立ち列んで居る。これが即ち『乾隆御筆十三經』であつて、漢の熹平石經や唐の開城石經の制に模倣したものである。此の石經などを拓本で見るときには、石摺の價值以上に何事も感じないが、實際古碑の林立して居る状態を見ると、一種敬虔の情の油然而して湧き起るやうな氣がする。これは國子監といふ背景の感じと相俟つて始めて起る感情であると思ふ。

寺門に在る碑で著名なのは、北京外城爛糊胡同の西にある法源寺の遼の應曆七年の石幢の正統高麗崇禎時代の碑及び清の雍正乾隆年間間の碑などである。又この寺には李北海の書を臨した模刻の碑面がある。法源寺は唐の貞觀十九年に建立された開忠寺のことであると傳へられ、また白松のある寺として知られて居る。

北京方面に於ける碑のことは李錫齡の校訂を経て乾隆五十七年に刊行

された珠星符の『京畿金石考』上下二冊に最よく記されてあるが、北京遼にて碑の古いものは、『魏征北將軍劉瑒碑』で晉の司隸校尉王密が元康四年九月廿日に建立したものと傳へられてある。水經注には阜城門外にあると云ふてあるが見えない。此の外には『晉康王碑』、『涿縣水經注』、『晉范滂王司馬廙廟碑』、『涿縣水經注』などがある。尤も北京附近といつても直隸省全體に涉つては、存在する古碑の數非常に多くにして、殆んど枚舉に遑なきゆゑ、先づ順天府の範圍内だけのものに就て調べて見るのと、隋代のもの、唐代のもの、若くは遼金元のもの等も少くない。試みに其の一斑を挙げて見よう。

#### 第一 大興(北京宛平縣所在のもの)

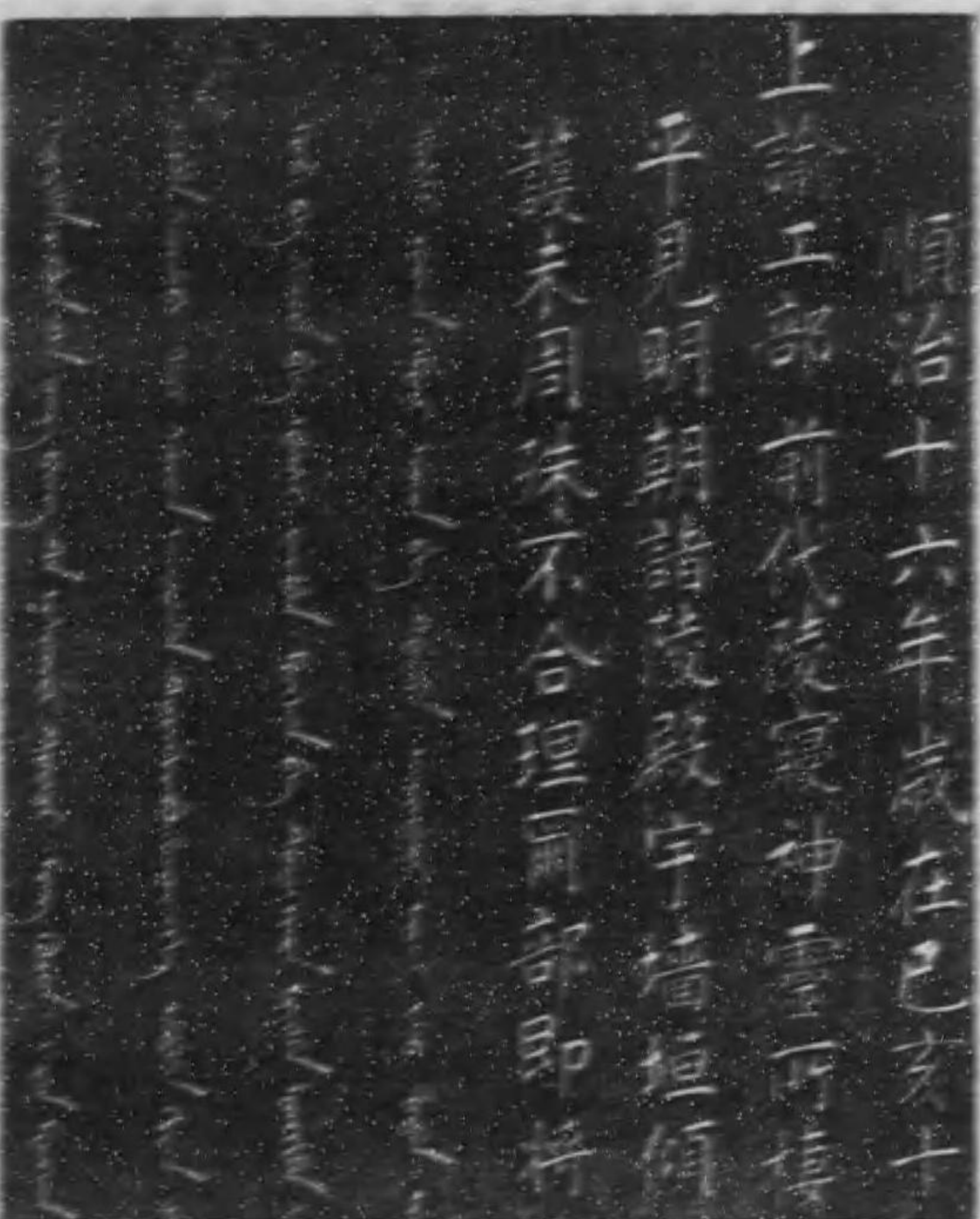
- ▲晉 魏征北將軍建成郡侯劉瑒碑 ▲石鼓(孔子廟大成門内) ▲隋 仁壽四年の白馬寺經幢 ▲唐 貞觀二十二年の泚泥碑寺心經を始め大足天寶開元主德貞元會昌大中乾寧年間に涉れる十五碑 ▲宋 番縣城南に在る石經外二石 ▲金 太祖平遼碑を始め天會天德大定明昌太和承安年代のもの二十碑 ▲遼 會同九年の尊勝經幢の外應曆保寧統和重熙濟寧景福成泰大康大安壽昌乾統年間に涉れる二十二碑 ▲元 定宗四年の尊勝經幢を始め至元貞元貞大德皇慶延祐至治泰定至順元統正年間に涉りて五十七碑もある。その内佛教大師演公碑趙子昂書、廣福寺碑香山寺の碧雲寺碑、昭德寺碑、趙世延書趙子昂臨の王右軍樂毅論、黃庭經、定武蘭亭、顏魯公字位帖、張平叔金丹四百字、五碑(今見えず)同じく子昂書張天師像贊、功德寺の番字碑などは注目すべきものである。

- 第二 良鄉縣には
- 隋 楊君護墓古碑
- 第三 固安縣には
- 金 明昌二年の應福林郎張君墓志、外金碑一、元碑二碑あり
- 第四 永清縣には
- 唐 聖曆三年の金輪石幢、外宋碑二、金碑四、遼碑三、元碑五あり
- 第五 香河縣には

#### 元 大都路香河縣坊市西道院仁公塔記

- 第六 東安縣には
- 金 大定三年の曹英建寧國寺碑、外金碑三、遼碑二、元碑三あり
- 第七 通州には
- 唐 貞觀年間の然燈佛塔題字、外唐碑三、後周碑一、元碑一あり
- 第八 寶坻縣には
- 金 大定十年の舍利塔銘、外遼碑二あり
- 第九 昌平州には
- 遼 延熹四年の冀州刺史王純碑、外遼碑一、唐碑二、金碑二、元碑二あり
- 第十 順義縣には
- 唐 大歷五年の開元寺碑、外元碑一あり
- 第十一 密雲縣には
- 唐 顯慶年間の孔子七十二子漢晉名儒像贊、外一碑あり
- 第十二 懷柔縣には
- 元 紅螺山大明寺碑
- 第十三 涿州には
- 晉 康王碑、外晉碑一、唐碑三、金碑二、元碑五あり
- 第十四 房山縣には
- 隋 開皇年間の大涅槃經、外隋碑三、唐碑十、金碑一、遼碑四、元碑十あり
- 第十五 霸州には
- 元 皇慶三十年の贈學田碑
- 第十六 文安縣には
- 唐 大中二年の張仁憲神道碑、外唐碑一、宋碑一、元碑一あり
- 第十七 大城縣には
- 金 天會十二年の重修廟學記
- 第十八 薊州には
- 唐 貞元二十一年の範鹿縣時侯墓誌、外唐碑五、金碑八、遼碑四、元碑五あり

第十九 平谷縣には  
 全 金 龍 鳳 馬 成 聖 碑 外 金 碑 一 元 碑 二 枚 あり  
 第二十 玉田縣には  
 全 明 成 將軍 李 梁 神 道 碑 外 金 碑 二 元 碑 一 枚 あり  
 滿 漢 對 譯 碑 文 一 例 第 十 三 區 長 監 院 上 德 門 内



己上再考したるには明碑や清碑などは極めて少ないが、若し此等を加ふることにすれば其の数は非常なものとなる。元碑なども城内を委しく

(拓本は後藤所蔵)

碑面に書いたものだから字配り上縦横の距離の必要もあつた譯けである。これらは古碑の拓本を見れば能く判る。北京を背景とする碑の文字は書として見るときは能く統一した文字には違いないが、特別に有名なもの、云ふのは餘り見受けない。何れも書としてよりも歴史上の事實を知るべき資料とする方のもので、語は實用方面のものが多いためではないかと思はれる。

八 文房具の歴史の考へ

書が時代の要求に連れて多少時代の思想から成る方向へ移りつゝあることは手はぬが、北京に於ける書の状態は必ずしも其の一方ばかりであるとは云へぬ。然し書の趣味に伴ふ文房具の方面は如何と云ふにこれは甚だ盛んである。支那の文字の美觀はこの文房具の盛んなのと併せ考ふる時は最も容易に理解されるのである。

徽墨と云ふ語は何人も知る如く安徽省の墨に湖南省の筆の意で筆墨はこれを指して他になし云ふことになつて居る。由來書を一定の型に収めて書き上げることが非常の練習を要し、また技術を要するものである。支那人の書に於ける技術の能實なることは誠に豫想外で、日本人は容易に近寄ることが出来ぬ。而して其の技術の裏面には文房具の力が大に與つて居ることを考へねばならぬ。筆紙墨に就ての支那人の苦心研究は一と通りでない。支那で文具の好みの高いことや研究者の多いことを見ると、其書の立派なものもあるは決して偶然でないことが首肯される。北京琉璃廠の胡開文支店、また天津估衣街の文美齋あたりに行つて見ると、氣に入つた逸品が割合に安く手に入る事が出来る。北京は國都として久しく文人學者投人の聚集する所だけに筆の要求その製法材料等の研究の積まれて居ることは云ふまでもない。嘗に筆ばかりでなく、墨でも紙でも腕でも中々盛んなもので、其の種類だけでも餘程ある。墨は胡開文の項墨を始め色々のものがある。曹素功のも本店と支店との兩種に亘つて色々の差等が出来る。また朱墨にも名品があつて、實際の墨の重さに劣らぬ程重いものがある。硯石の端溪水巖な

るもの、また徽州その他の名所に於て製造のよいかのが深由漢碑あたりに見出される。殊に實用向きの徽州漢碑の遺蹟の多いには少なからず驚嘆した。かやうに北京の文房具趣味の高く且つ普及して居るのを見る時は北京の書の見事なるは偶然であるまいと斷言せられる。

北京支店の書は今日の如き状態では維持せられないであらう。年々の外國留學生の思想また新教育を受けた人々の感想よりして筆次ペンや萬年筆が盛んに使用せられ、又その空氣によつて筆をとらぬ傾向になるものも増加するであらう。従つて今後四五十年も経れば北京市場に見る書は下るとも上ることはあるまいと思はれる。さば云へ今日のところ胡開文その他一二種のものを除けば北京の書は見事なものである。而して此等が文具の愛好心研究心と相俟つて共に發達して來てゐると云ふことは、北京の書美を觀るも者の留意すべき點であると思へる。

九 結 論

要するに北京は書と如何にもよく調和してゐる。北京を背景としてゐる書は面白く觀せられる。北京は支那文明の一面であるだけに又よくすべての支那式文化と文字との調和がとれてゐる。書の巧拙の點から云へば、北京に見る所の書が必ずしも能書のみではない。殊に胡開文の如きは甚だ見るに堪へぬものである。然し巧拙の問題を離れて、書の價值を北京と云ふ背景から考へて見るときはよく考へてゐると思はれる。恰も墨が雲を得てその意味をなすやうに、北京の書はその背景を得て調和してゐる。書そのものが日本人の書と異なり、運筆の上にはフツとした氣持が現はれて、何となく大國大國の趣を示してゐることは其人の首肯する所である。その書が北京の背景を得て、國都に於て、城内に於て、また對聯に於て、或は神額に於て夫々調和して見られるのである。日本の書はこの點から云ふと、やゝ趣を具にしてゐるだけに日本書を北京に持つてゐて、殿堂や廟宇に掲げたとしたならば調和しないに極まつてゐる。日本人の書にはフツとした大國の趣を表はして居るものは稀である。假令あつたにしてもそれは何外の方である。日本

調へたならば、また深由見出されるに相違ない。現に北京の孔子廟に行くと門内老樹の本立の間に懸懸たる大理石の碑林を見る。この碑は進士に及第した役人が必ず懸納することに定められてゐたもので、その数は餘程ある。大成門のすぐ側には在るものは至正年間の進士登第の碑で、門を入ればまだ康熙乾隆の御筆に成る碑が深由ある。曲阜のそれに比べると規模は稍小さいが、その数の多いことは同じやうである。康熙乾隆の碑の特色として別設事新らしき云ふ語のものはないか、其の能書や題首の複製で大きいことは際立つて目立つ。又此の時分の碑文の面は右字を漢文で左字を滿文で書いてゐる。(その一例寫其卷五)

書の方面から云つても、北京其その附近の碑の文字は山東方面の古碑のそれとは違ひ古雅と云ふ感じは勿論しない。然し胡開文門聯などに見るやうな雅い書は見出さない。而して文字は何れも一字一字その碑面により凝まつて居るばかりでなく、全體の調子が又よくとれてゐる。すべて書として之を見るときは先づ日本書の碑文の書よりも支那碑の方がよく手に入つた書でかゝれてゐると云ふことに氣がづく。

固みに日本でも無数の硯石を手にて筆の硯石などに利用するは往々見受けるが、支那では南人の碑を持つて筆硯石にて其の碑文を磨き、立派な新しい石のやうに仕上げて再びそれを硯石に用ひることは、殆んど公認の癖で、世間でも餘りこれを考へない。従て後世の碑には此の種の石が深由あるに相違ない。磨きあたりの碑若くはそれ以前の碑で後世に存在しない者のあるのは、石工の新機を巧手段の爲めに利用されたのであるまいか。元來支那人は人の見て居ない所を爲す事には道徳上の惡事にあらずと思つて居るから、古人の碑を向ふ磨き事することなどは平氣でやる。又碑の一部を磨き、手磨きあたりの磨き事、磨き事、其處に後人が自分下刻文を入れてゐるものが懸かる。磨き事には殊にそれが多い。支那人の國文運筆から云ふと、それは尋常の書道のことである。又運筆などの場合でも、磨き事に氣に入らぬ所あれば、此の筆次で訂正再刻して居る。碑の文字は書書と云つて、書は筆で寫つて直接に



自第一卷至第六卷 書苑掲載墨寶表(二) (支那之部) ○印其真本

Table with columns: 品名 (Item Name), 筆者 (Author), 掲載號 (Issue No.), 所藏者 (Collector), 品名 (Item Name), 筆者 (Author), 掲載號 (Issue No.), 所藏者 (Collector). Contains detailed bibliographic information for various items.

Table with columns: 品名 (Item Name), 筆者 (Author), 掲載號 (Issue No.), 所藏者 (Collector), 品名 (Item Name), 筆者 (Author), 掲載號 (Issue No.), 所藏者 (Collector). Contains detailed bibliographic information for various items.







孔固亭秘藏 玻璃版精印

# 宋揚官本十七帖

法帖 仕立

定價金貳圓

送料金八錢

王右軍の蘭亭叙に次て其の種類の多きは蓋し十七帖なるべし、然も眞の宋搨に係るものは甚だ罕なり。近者孔固亭主人不折先生の獲られたる此の一帖は、首尾を通して神采奕々、宋揚官本たること毫も疑を挟むの餘地なき善本なり。依て更に先生に請ふて之を玻璃版に付し、以て同好者の机右に致すこと、せり。希くは速かに一本を求めて十七帖の眞面目を窺はれよ。

# 陽明山人若耶溪送別詩冊

縦一尺八分 横五寸五分 玻璃版精印 高尚折本仕立

定價金壹圓五拾錢

送料金八錢

王陽明は固より翰墨の小技に腐心するが如き小人物に非ずと雖も、書をして果して人格の表示ならしめば、此の偉大なる人格ありて、始めて其の書大に貴ぶべきなり。此の若耶溪送別の詩冊は、孝宗の弘治十七年四月望、陽明が都下の寓舎垣南草堂に於て作られたるもの筆致雄致にして渾厚なり、左れば一たび之を披けば恰も陽明其の人に對するが如く、頼に心胸の豁然たるを覺えしむ。

# 多田親愛和歌十二月帖

縦七寸 横二寸五分 三十一折 桐表紙折本仕立

定價金六拾錢

送料金八錢

明治年代に於ける假字書きの名手を求むれば、蓋し多田親愛先生の右に出づるなかるべし。先生の筆致は如何にも流麗にして些の滯運を見ず、實に千蔭以降の第一人なりとす。此の帖は先生が正月より十二月に至るまで、花鳥の短歌各一首づつ、を書き連ね、手本として門人某に與へたるものなり。今回某に請ふて寫眞金屬版に附し、以て假字を學ぶものに薦む。

傳教大師筆延曆寺藏 玻璃版精印

# 寶國 天台法華宗年分緣起

縦九寸二分 長一丈一尺三寸 緞子表紙卷物仕立

定價金貳圓五拾錢

送料金八錢

延曆寺の開山傳教大師の筆として同時に傳來する天台法華宗年分緣起の一卷は國寶の一たり。此の卷は麻紙烏絲欄中に認められたるものにして、界長八寸、百八十八行あり、千餘年前の筆蹟として眞に珍重すべきのみならず、其の書風も亦李唐人に劣らざるの妙あり。今回京都の平安同志會に於て之を出版し、其の頒布方を弊房に依頼せられたれば、茲に稟告して切に大方の高需を待つ。

東京市神田區佐久間町一ノ七一  
電話下谷七〇六、振替東京七三七

西 東 書 房

終

